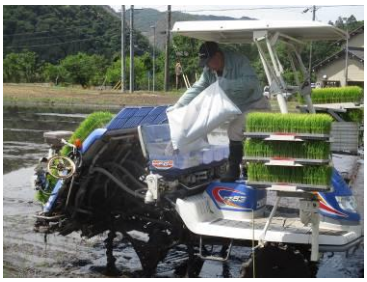
別紙

岐阜農林事務所の普及活動状況　令和４年５月 31 日現在

今月の重点活動

■水稲　マイクロプラスチック削減に向けた肥料試験を実施



【試験ほの田植え作業】

近年の稲作では、省力化の観点からプラスチック被覆された緩効性肥料が多く使用され、肥料分が溶け出た後のプラスチック殻が河川へ流出して海洋汚染等の一因となっている。そこで岐阜農林事務所は、ＪＡ全農岐阜県本部、ＪＡぎふ、肥料メーカーと連携し、マイクロプラスチック削減に向けた施肥試験を羽島市、各務原市及び本巣市で実施することとした。

５月 10 日には、本巣市の水田 25ａに現地試験ほを設置した。当日、岐阜農林事務所は関係機関と共に田植作業に立会い、作業性や肥料の形状について調査し、これまでのプラスチック被覆肥料と遜色ない作業性であることを確認した。

農林事務所では今後、試験水田の生育状況や収量について調査し、現地における普及性を確認する。

（地域支援第三係・松本　政行）

ぎふ農業・農村を支える人材育成

■えだまめ　岐阜女子短期大学食育推進事業「枝豆レクチャー」

【レクチャー風景】

この事業は、岐阜女子短期大学生協学生委員会「ぴーちクラブ」の活動として、学生にえだまめの農業体験を通じて、ものづくりの大変さと重要性について理解を深めてもらうとともに、食の意味と大切さについて考えてもらうことを目的に平成 24 年から実施されている。

えだまめの定植や収穫体験の前に、基礎知識を得るための講座として、５月 18 日に、岐阜女子短期大学講義室において「枝豆レクチャー」が行われた。ＪＡぎふが枝豆生産の概要についてＤＶＤや資料を元に説明を行った後、岐阜農林事務所から、生産者で組織する「ＪＡぎふえだまめ部会」が取り組みつつあるＧＡＰについて説明を行った。

今年は農作業体験も計画されており、生産者との交流を通して、コロナ禍の農業の動きや生産者の対応などについて学生が学習できるよう支援していく。

（園芸産地支援第一係・小森　志保）

■いちご　新規就農者研修所　成果発表会

【成果発表の様子】

５月 17 日に、ＪＡ会館において「いちご新規就農者研修所第 14 期生の成果発表会」が開催され、研修生３名が研修所で 14 か月間研修した成果について発表した。

研修生は、それぞれ約 10a のいちごほ場の管理を任され、上手くいった点や失敗した点など、グラフ等を用いて説明を行った。

出席した生産者代表や関係機関からは、発表内容について、失敗した要因などを問う鋭い質問の後に、就農に向けた温かい助言も加えられた。

３名の研修生のうち１名が、今年６月に岐阜市で就農する予定であり、岐阜農林事務所では関係機関とともに就農後の支援をしていく。

（園芸産地支援第二係・菊井　裕人）

安心で身近な「ぎふの食」づくり

■水稲　ジャンボタニシ対策研修会

羽島市内の水田では、毎年ジャンボタニシが多発し、移植直後の苗の食害が散見される。

ジャンボタニシの食害を少しでも減らすため、５月 25 日にＪＡぎふ正木支店において研修会が開催され、17 名の生産者が参加した。

研修会の中で、農林事務所からジャンボタニシの生態と対策について説明し、その後、育苗箱とペットボトルを使った捕獲器の作り方の説明を行った。

【研修会の様子】

参加した生産者からは、思ったより簡単に作れることを知り、研修会で作った捕獲器をほ場内に設置してみようとの意見もあり、捕獲器に期待している様子であった。

今後、通年でのジャンボタニシの防除について、随時情報提供を行う。

（地域支援第二係・木村　裕子）

■大豆　栽培こよみ検討会に参加

５月 12 日に、ＪＡぎふ本店において「令和４年産大豆栽培こよみ検討会」が開催された。岐阜農林事務所のほか、ＪＡ全農岐阜県本部、ＪＡぎふなど 17 名で今年度の大豆栽培体系について検討した。当日は、大豆を栽培する上で問題となる帰化アサガオ類やハスモンヨトウの防除を中心に協議を行い、新たな中期除草剤の採用やスマート農業に対応した病害虫防除体系の掲載等の改訂を行った。

【検討会の様子】

令和４年度は、水田農業の担い手が麦刈後の水田を活用し約 140ha で大豆を作付する計画となっており、岐阜農林事務所は排水対策、土づくり、適期播種などの指導を行い、大豆の安定生産に繋げていく。

（地域支援第三係・松本　政行）

■ＪＡぎふ有機農業実践塾　第３回研修会の実施

５月 14 日に、ＪＡぎふ真正おんさい広場及び株式会社ＪＡぎふはっぴぃまるけのほ場において「有機農業実践塾」の第３回研修会が開催された。「有機農業実践塾」は有機農業に取り組む担い手づくりの一環としてＪＡぎふ主催で企画運営され、令和４年２月から月例で実施している。ほ場管理をＪＡの出資法人である株式会社ＪＡぎふはっぴぃまるけが、企画運営の支援及び講師を岐阜農林事務所が担当している。受講者は 10 組で、すでに直売等を行っている人や初心者など様々な経験段階の参加となっている。

【体験実習の状況】

当日は、作付け計画の立て方、土づくりとしてその効果と科学的な考え方、たい肥の使い方について 50 分程度の座学講義を行った。また、４月に定植できなかった夏野菜とさつまいもについて室内で定植の方法を説明した後、ほ場で品目ごとに説明しつつ、定植作業を体験してもらった。この日の講義内容は、有機農業でも慣行栽培でも変わりがないことも意識付けを図った。第４回研修会は６月 11 日の予定である。

（園芸産地支援第一係・砂川　匡）

ぎふ農畜水産物のブランド展開

■にんじん　春夏にんじん収穫始まる

今年の春夏にんじんの収穫が５月７日から始まった。今年は１、２月の低温により、生育の遅れが心配されたが、例年通りの収穫開始となった。

その中で、５月９日に、各務原にんじん選果場において「出荷説明会」が開催された。説明会では、市場から販売情勢、ＪＡ選果場担当者から出荷に関する説明があった。

岐阜農林事務所からは、にんじんの黒あざ症対策について説明し、対策の徹底を図った。今後もＪＡぎふと連携し、春夏にんじんの安定出荷に向け指導していく。

（地域支援第二係・水川　誠）

【収穫されたニンジン】

■水稲　県育成品種「こなゆきひめ」の移植が行われる

岐阜県で育成された米粉専用品種「こなゆきひめ」の栽培試験を、令和３年度に引き続いて今年も羽島市内で試験栽培を行うことになり、５月９日に田植えが行われた。

昨年は、倒伏により減収したことを踏まえ、栽植密度の検討を行い、当日は複数の試験区を設けて、地域の栽培に適した栽植密度を確認することとした。またイネカメムシの吸汁による不稔の発生を減らすため、令和４年産では防除体系の検討も実施することとしている。

岐阜農林事務所では、収量向上や高品質を目指して栽培支援していく。

（地域支援第二係・木村　裕子）

【移植の様子】

■カキ　摘蕾講習会

４月下旬～５月上旬にかけて、管内柿産地において摘蕾研修会が開催された。摘蕾は柿の大玉・高品質生産のために最も重要な作業の一つであり、毎年この時期に開催されている。

岐阜農林事務所から、今年の生育状況や病害虫防除のポイントを説明した後、実演による摘蕾作業の技術指導を行った。

本年は１、２月が低温であったが、３月中旬以降気温が高く推移したため、発芽、展葉は平年並みであったものの、以降の生育が早まっており、例年より早い摘蕾作業となった。

（園芸産地支援第二係・瀧　孝文、杉浦　真由）

【摘蕾講習会】